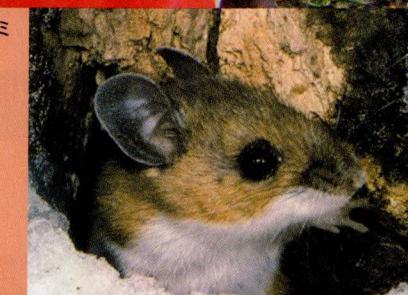


ネズミ

今年の干支はネズミ。日本の昔話に登場したり、人とともに海を移動したりと、ネズミと人の関係は深く長い。農作物への害や伝染病の媒介などのマイナス面もあるが、食用や家畜などとして利用する人びともいる。特集では、ネズミと文化とのかかわりについて紹介したい。



パプアニューギニアのナンヨウネズミ
(マティスー・スミス提供)



巣穴から顔を出したアメリカのシカネズミ
(Photo courtesy of the National Park Service)



アンデス原産のクイという食用ネズミ

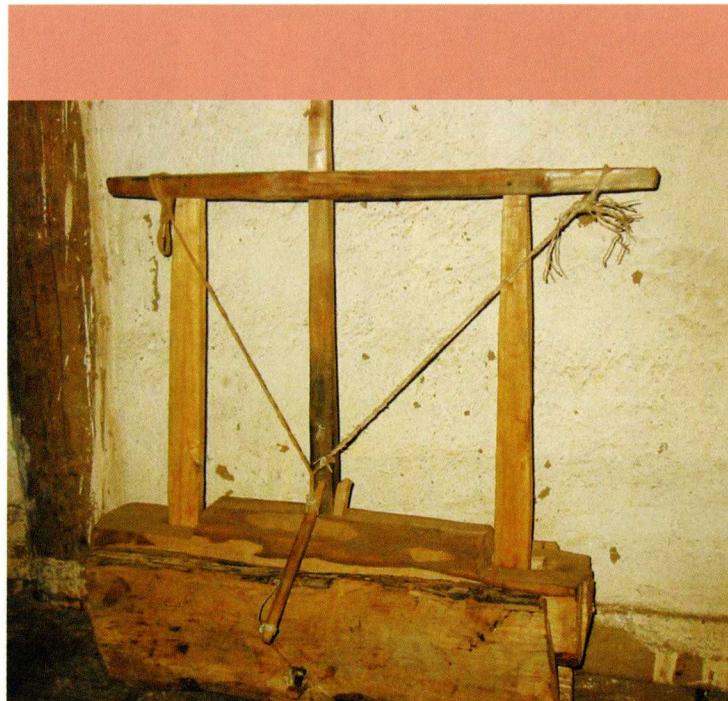


ペエプロの古代遺跡に
残されたネズミの岩絵
(ペトログリフ・ナショナル
モニュメントにて撮影)

駆除と食用

ベトナムの山間部の村で、うつかり食べ物を置きっぱなしにしたまま寝てしまつてはたいへんである。清少納言も「懶だゲリラ」どもが「走りあり」、「皿を返し、ものをかじり、夜の森閑をすたずたに引き破る。密室性の高い住宅が発達するごく最近まで、われわれに寄り添つて住みたがるネズミを、どうやって遠ざけるか、彼らの放縦をどうやって取り締まるかは、人類にとって大いなる課題であつたに違いない。大げさな話ではない。

数年前に、ベトナムのメコン・デルタの農民が酒に漬けるためにコブラを乱獲した結果、ネズミによる農作物被害がひどくなつてたいへん困つたという話を聞いた。ネズミは田畠の稔りを掠め、家に



ベトナム西北部の盆地民、黒タイの伝統的なネズミ取り。
ネズミが棒に触れると、重しを支えているつかえがはずれ圧死させる仕掛け

にくもあり、いとおしくもあり

樺永 真佐夫
(かしなが まさお)

本館民族社会研究部

あがり込んで財を弄ぶとして憎まれてきました。ましてや、ベストなど、彼らのまき散らす病原体で人が死ぬかもしれないとなれば、ますます憎まれた。だから罠、飛び道具、毒、呪文など、人知の限りを尽くして、ネズミはしばしば駆除されようとしてきたのである。

じつは、人のまわりにいくらでもいるネズミの肉は、淡泊でまずくない。アンデスではテンジクネズミ(クイ)を、食用

伝承のネズミ

として何百年も前から養殖している。にしへにネズミを捕らえたからには皮ひんむいて食べてやらん、という地域なら、世界中にたくさんあるし、日本や中国などでは糞まで薬にした。

伝承の世界にも、わずかな隙間さえあればネズミは入り込んでいる。大国主命

人間を救う

二〇世紀になつて、ネズミは産業社会の都市生活では次第に視界から消えた。そのためか、アメリカ生まれのミツキーマウスは愛らしいキャラクターとして、今や世界中の愛人者である。ネズミとの長い戦いの歴史を、先進国の人々は忘れた。

さらに、目立たないところでネズミは立派に社会貢献もしている。世界中で生体実験用にネズミは飼われている。あるいは火災などの予知能力が高いとされ、防災にも役立てられようとしている。もはやネズミに人間が救われるのも、おとぎ話の世界ではなくなるかもしれない。

アンデスで飼う

鵜澤 和宏
(うざわ かずひろ)

東亜大学准教授

ネズミを食べる

医療実験に使われるモルモットは、もともと南米アンデスで家畜化された食用のネズミである。現地ではその鳴き声からクイとよばれ、現在も、エクアドル、ペルー、ボリビアを中心にアンデス一帯で飼育されている。

食習慣とは保守的なもので、どれほど栄養になるといわれても口に運ぶのがためらわれるものがある。ネズミは心理的障壁が高い。小学生のころ、ボールを拾おうと顔を突っ込んだ側溝でドブネズミに襲われかけ以来、わたしはネズミ恐怖症である。想像するのも遠慮したい。

ところが、アンデス文明の起源を研究する調査団の一員として、ペルーで遺跡から出土する動物骨の分析を担当するこ

ペルーの山岳地域では、現在も伝統的なクイ飼育を見る事ができる。家々では力馬で火がともる暖かい台所にクイがなれば放し飼いにされている。ネズミ算式に増えるとはい、日々の食卓にのぼるほどの数ではない。祝い事など特別な機会に振る舞うため、大切に育てられている。そして、日本から来た珍客は、心優しいアンデスの人ひとにクイでもなされる機会に恵まれないものである。

ところで、クイは食用としてだけなく、儀礼や呪術的な医療行為にも用いられている。遺跡からはクイのミイラや、クイを象った土器なども見つかっており、インカに先立つアンデスの先史社会でも人の暮らしに直接に結びついた動物として重要視されていたことがつかがわれる。クイの家畜化は約六〇〇〇年前ごろと推定される。寒冷な山岳地域で寒さを逃れ、餌を求めて人家に住み着いた個体が飼い慣らされたと考えられるが、祖先種や家畜の起源地について詳しいことはわかつていない。

昔話とネズミ

小池 淳一
(こいけ じゅんいち)

国立歴史民俗博物館准教授

豊かさ、幸福のイメージ

ネズミのことを俳句の世界では正月のあいだだけ「嫁が君」という。この季語はもともと、日本各地でヨメジョ、オクサン、オヒメサン、などと正月にはネズミといふことばを口にせず、言い換える忌みことばからきている。害獣のように考えられるネズミを敬称でよぶことで、新しい年を豊かな時間にしたいという願望が込められているのだろう。方言ではねずみをフクタロウ（福太郎）とか、オフクサン（お福さん）などともよんだというから、この小さな動物が福と結びつく観念があつたことを示している。

日本の昔話伝承のなかでもネズミは豊かさや幸福、あるいは勤勉のイメージ



『鼠草子絵巻(第2巻)』(サントリー美術館所蔵)

と結びついている。

「ねずみ浄土」という話では、地下の世界にネズミたちの世界があり、よいおこないをしたおじいさんはその世界で楽しく過ごしたのち、たくさんのお宝物を獲得することになっている。「ねずみの嫁入り」は、ネズミが娘の嫁入り先を探し求め、お日様がいい、いや、お日様の光をさえぎる雲がいい、いやいや、その

雲を吹き飛ばす風の方がいい、いやそろでなくて、風をさえぎる壁がいい、迷った末に、壁に穴を開けることでのけるネズミが、やはりいちばんいい、という話であって、結末が幸福な結婚に結びついている。

中世に盛んに作られたお伽草子という短編の文学作品のなかにも、ネズミが幸福な結婚を願う『鼠の草子』とよば

れるものがあり、そこで描かれるネズミの世界も春の景色がのどかに広がる理想郷であった。

ネズミに託す

一方、「ねずみ経」という話では、家のなかに住んでいるネズミの行動を、お経のようにそれらしく唱えることで泥棒を追いはらい、危険から逃れた、ともに生き、その行動を細やかに観察する視点がかつての日本人の生活にあつたことを示している。以前は日本全国でよく聞かれた「昼間に昔話をするとネズミに笑われる」とか「小便をかけられる」という戒めのことばも、昼間にのんびりと昔話をしないで働きなさい、という戒めをネズミに託していよいよにも思われる。そうすることで幸福で豊かな生活が可能になるという意識があつたのかもしれない。

ネズミと日本人の求めてきた豊かさや幸福とは意外に深い関係があるように思われる。それは人間の近くで生息してきたこの小さな動物に投影された大きな問題である。

ネズミ

とになった。研究テーマとしてもネズミに近づかぬよう注意深く遠ざけてきたにもかかわらず、ペルーでは研究と食卓の両方に幼少期以来のトラウマと向き合うことになった。

ペルーの山岳地域では、現在も伝統的なクイ飼育を見る事ができる。家々では力馬で火がともる暖かい台所にクイがなれば放し飼いにされている。ネズミ算式に増えるとはい、日々の食卓にのぼるほどの数ではない。祝い事など特別な機会に振る舞うため、大切に育てられている。そして、日本から来た珍客は、心優しいアンデスの人ひとにクイでもなされる機会に恵まれないものである。

ところで、クイは食用としてだけなく、儀礼や呪術的な医療行為にも用いられている。遺跡からはクイのミイラや、クイを象った土器なども見つかっており、インカに先立つアンデスの先史社会でも人の暮らしに直接に結びついた動物として重要視されていたことがつかがわれる。クイの家畜化は約六〇〇〇年前ごろと推定される。寒冷な山岳地域で寒さを逃れ、餌を求めて人家に住み着いた個体が飼い慣らされたと考えられるが、祖先種や家畜の起源地について詳しいことはわかつていない。



台所の片隅で飼育されるさまざまな毛色のクイ

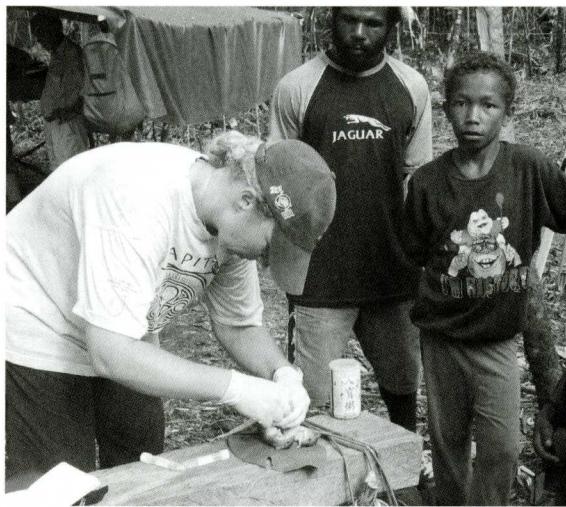


掲載の系統分類は学問上不明な点の多い領域なのだが、クイとその祖先種はテンジクネズミ科に分類される。ネズミ類の進化の中でも初期に分岐した独立性の高いグループの一員だ。ネズミ科と異なり、ゴム管のような長くヌメヌメとした尻尾をもたない。一匹まるごとを素揚げにしたクイが目の前に出されるたび、わたしはお尻のあたりを凝視して、耳の短いウサギだと自らに言い聞かせて口に運ぶ。いつたん口に入れてしまえば、二ワトリよりもくせがなく淡泊な味わいはなかなか美味しい。つづく食習慣は文化的なものだと実感するのである。

人の移動とネズミ

印東 道子
(いんとう みちこ)

本館民族社会研究部



ネズミから遺伝子分析用サンプルを採取する
(パブアニューギニア、エメラウ島)マティスー=スミス提供

さらに、ネズミのDNAを分析すれば人間の移動の様子も明らかになると考えた同准教授は、東南アジアからオセアニアにかけて分布するナンヨウネズミのミトコンドリアDNAを分析した。その結果、三つのハプロタイプ(遺伝子型)が存在し、それ①東南アジア島嶼部のみ、②東南アジア島嶼部からソロモン諸島まで、③ソロモン諸島以東のみ、という限られた分布を示すことがわかった。ボリネシアに広まつたナンヨウネズミは、ボリネシア人の故郷と目されているフィリピンには分布しておらず、②と③の両方が分布しているのはインドネシアのハルマヘラ島のみであつた。このことは、オセアニアへ拡散してきた人びとの移動の様子がそれほど単純ではなかつたことを示しており、今後もネズミの研究から目が離せない。

ナンヨウネズミは、ボリネシアのほとんどの島に分布する。原産地である東南アジアからこれらの島へは泳いで渡れる距離ではなく、人間が移動する際に、ともにカヌーに乗つて島から島へと広まつたと考えられてきた。これは、人間が島での居住をはじめやいなや、ネズミの骨が見つかることからも明らかである。

かつて、オセアニアのネズミは、ブタやイヌのよう人に間が意図して連れ運んだのではなく、「こつそり」と「カヌー」に乗り込んだつまり、歓迎される客としてオセアニアに広まつたと考えられている。ところが、オセアニアのネズミを遺伝学的に研究しているニュージーランド・オークランド大学のエリザベス・マティスー=スミス准教授は、ナンヨウネズミは湿った環境を嫌う習性があるため、隠れてカヌーに乗つたことは考えられない、その証拠に、ボリネシアの島々へ寄港したヨーロッパ船にナンヨウネズミが乗り込んだ証拠はないと指摘する。つまり、オセアニアへ人類とともに移動したネズミは、食用にするために意図的に人間が連れ運んだ可能性が高いといつ。

焼畑とネズミ

中辻 享
(なかつじ すすむ)

福島大学准教授



ネズミの串焼き。塩をつけて焼く

とはこの時期になると焼畑の周囲に罠を張りめぐらせておく。一〇～一月にネズミの捕獲量が多くなるのはこの時期がちょうど焼畑の収穫期前後にあるためである。

伝統的な罠はタケ製であるが、近年は鉄製の罠が普及している。ネズミがおもに活動するのは夜である。人びとは焼畑の周辺にこの罠を四〇～五〇個仕掛け、一晩中見回る。獲物がかかった罠は餌を付け替えてもう一度仕掛け直す。このようにして一晩でも多くのネズミが捕獲できる。人びとのネズミに対する執念は深く、わたしの調査村では焼畑を大規模におこなうため、他村の者までが泊まり込みで猟獵に来る。

ネズミは米を食らう害獣である。しかし、ラオスの人びとはこれを逆手にとり、罠で捕獲し、重要な食材としているのである。

産し、一度の出産で五、六匹もの仔ネズミをもうける。仔ネズミは生後三週間で離乳し、五週間ほどで生殖を始める。まるでネズミ算のように、爆発的に増えていくのだ。驚異的な繁殖力を誇るシカネズミだが、生息環境を脅かすほど過密にはならない。それは、捕食されるからである。コヨーテやヤマネコ、猛禽類の主要な餌となるシカネズミは、食物連鎖の底辺を支える大変重要な役目を果たしているのだ。また、他のどんな野生動物よりも数が多く、木々や草花の実を食べて種をあちこちにまき散らす。そして芽吹いた植物は、砂漠の厳しい自然に生息するたくさんの動物の生命を支えているのだ。

この地に暮らす先住民ナヴァホは、シカネズミを世界に君臨する死の精靈として恐れてきた。この地域の風土病に、シカネズミが媒介するハンタウイルス肺症候群がある。ネズミの排泄物から人に感染し高熱と肺水腫を引き起こすのだ。ナヴァホの伝承には、この病気を予防する教えがあり、ネズミとの接触を厳しく禁じている。

ネズミを駆除せず、程よい距離をとりながらともに暮らしてきたのだ。小さな生命を尊重するナヴァホの教えは、ほかの生命とともに生きることの大切さを教えてくれる。そしてネズミは、自然と生命が繋り広げるダイナミックな営みをわたしたちに気づかせてくれる。今年はネズミ年。砂漠のシカネズミに想いを馳せながら、今一度自然とともに生きることについて考えてみたい。



シカネズミ(シカシロアシマウス)
Dr. Lloyd Glenn Ingles © California Academy of Sciences

砂漠に生命の種をまく

谷本 和子
(たにもと かずこ)

関西外国语大学准教授

特集 ネズミ